

古今著聞集 二 (元禄三年版)

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

古事記

二



古今着風集卷之二
祝友



57B0530

此作の後より前より祝友と號す。宋元以來一千五百八十年
間の著述を續りて三十代鎌明天皇十三年か西暦
はまく今御歌近の像珍繪巻蓋をうさり
なり序内にうそせぬくわざめあへうる紙をのべ
た所ふとぞは神ありするやへなりてやうけそじ
やされど伊豫と雅波塔はよびともか藍と織
もろれよきり御くるをうらり火をうらて肉身化

ゆきり般運用の宗後天皇三代の方承後わいより
てぬ後いまさかまのうじに推古天皇の御すひまど
そのまこと。年をすする園の伝よそれりうあ事のそふうりて
そんきれ疊故とくれくは法の真隠とりておうてそれ
よりびくに佛は弘通して効蹊ゆる事や
我のれは六重塔を弘めまくらすくたすへ光明
天室の山陰用のしもとのとすらむの宮を那波真人が
ゆゑの美の金色の像ありとせ代をくふ教わり
孫うくらかくは賤よ原くらかへ教せやとくが
あ方ふわりやりゆくやくうてによへて又見てく

落の落とすとみれゆねうら般運天皇傳ふつらす
れ年西月細目生れすと耐赤光而のうにて後年
ふくらむは多甚くしげに月の後よく地作くゆる
年は一月十六日の為三づくあかゆのとをう候と今
南を佛く唱へあた丈れ由年百脉から始く傳を徑
縫とおく海せり八年よス日往といふ人海りてをすと
札してやく敬礼救世尊世音傳院事方栗教主とお
ぐとまく光とくか内をす肩をくりひらばくわら
あか文朝述年厄葉像が勧め石像と後も大吉種
馬子者御はよゆして年あとらばてよせりか一年

天下病れどもて死のるの後を討ちのびら割
寄合れど并の中島れ篤海し物見かく候と傳
ど奉りていと我坐ひあれ御ゆく御よ摸多古寺佛
地をひろめ社をすすりて病ぢたりて死のるの後
もとそぞ名をば人の令金海にとすにうりてみこと
のりとてはなを停らせし御守令作成かく
壹倍を焼かうほしてはなと滅亡とば附経済れま
せんじるる太字悲泣懐惄一様すすうなりけり
もふたりて雲なして風うとうをすりぬて列
内裏やけねを度をすれ侍又用的天皇候よけを

てよりのねはを與せあり候我古寺勃然かく是を
おこかわびがせはははをよりえひまつらをすれ
まのく大官のひがくとて宣うて三室のめりる事
人ひがくとてはよ大官ひととせすらうるまきうる
ゆくははの安寧の運居が承見と清下に奉る
軍あさめにさめて前城さんひ人をとひては安寧の
事よ告あらむるにうりてひがくおれ跡よことりやく
おれわいじ中島篤海曰くおれにて安寧とて
おれわいじ中島篤海曰くおれにて安寧とて
軍こにして號おれおこりありまく海うき討をす

當年十六にて大内軍に敗れ、後より兵庫守奉の爲め
ねもとのあまりのくは天王像ともども御身をもててやる
えやこの上にて御をばして立りて紙とて然
御めあひて御室主の儀とあじてても儀と立て
お官用ぐ御てキテヒをもひゆかねね松井本
丸より立とまのよのぎりてりべれ氏のうみよわく
おそれてひきをみればゆうひよあくろきりもな
文を縫りわじとふがほとては天王ふらうひくをと
とをうじ定ひう敷れ夫よかひてそくくもうて
遂にうじひのわくとありさうねよあらぬ事あ

もれへくも前とゆの毛すりにけのわく水く縫
化度打まひらひあまれり休文

あ麻のち六推古天皇のゆす聖法をあくさくめ
もうて麻呂祝重達臣ミツマニへ万法安らじと号す
別山教もふかびくられよきり達立は後室アフミ
教主者志からそて平地御藍カタハシ地改めて役ハシ若
侏クシれれ地よもよれよきり金臺カツイ比丈ヒヂヤのほ勅ハシタれ
の牛ウシよ金洞カツドウ一櫻イチヨウあまれ孔雀コウサクの五像ゴジヤク一神イチジンと云ある
い像イミへわ者の多年れがよしとスレが若行ハシタれかひり
て百脉ヒツモツ中より天王の像カミがありあひく金臺カツイお

かうきは堂あひしの雲石ありむりめ者孔蘋明
五の後を勤候の時一云主の林をうりて石ゆ邊
えよ天やまの山を白風す年はも蘿の草冠候
余作とて休養とぞれも自ら不憚
の湯れりわらる金奉すりは今の場小易りて松の
山林圓畠お殺万町を放入されり是より漫々茶庭の出現
ある建立の後百六十二年とて大根天やまの山阿摸佩
大根尹能とのお慶智にけりきりのたま小窓毛い女
ありて假のまぐくあくびくふくらは紫櫻とから幸で
まや山林出家城主のびつめあちの紫若と一卷て鑑

の津利とのじ五年宝字七年六月十四日茶表を
ぞうてゆく御坐津立の後とあ令とく被多和と被
てゆく被とく生身の海色とくあくびく被く伽藍の
門園と生身とすが念の昌向月か白風の刻よとく
比丘尼阿僧祇とくあくびく海九郎が主と見せん
とあう百枝の菩提とゆく邊に修羅場うりをすが
えとく半船禪尼報私身おあくびく化人れ章とちくと
くあくびく教説とれく宣傳とよきにあくびく無形
本とをそまの因ふ事のうきをはめあくびく川
かくあり代程は千金以上より化人みづく事の

とて張りてあらうの御家とて御りてとて参り候
井とほひにあらうおまきの小をひちえあらへる人巻
喫まじつゆを回らるタ文化人の女忍すゑて化尾
ふ事とよ御わらやとふ別との所里本巣との所
み義化也とけく女人薰衣把を袖と手とひ
とて御坐りてはかの軒をとく成の振り寅
此振よ身もとふまみへの身姿と振あくく
下行と拂ふてさげりつて化尾と冠玉との津
おりあらわせへうなぎとくはせり方あ
ばねぬ身姿のもう舟をつらと浦でと金の





光成あくをふあれりへ一經發起の席うちのそーも
三体多々の者歸下れりと申下る事遂の候中止
と申八教在教の代々これ說經一部の源文釋号
詔諦の全云化尾ゆうては句の偈を次ぐて
ああてづく

往昔迦葉說法所

今來法起作佛事

聖賢西方故我來

一入是場永離苦

半身のああきニ無力ふうり來若きをかほ半身ばらる
化人の若小よりてあ無儀のとく御坐く御坐そもく
ヨリ若知識りどきのやうり能の人代まのひつぞ

言ふにこれへあへ 捨て世間は衰えへ 織姫へよがたの
口くちにされ前子報せ多く車船をりそのをよまく聞ぐふ
とあ歎きしゆべかく伴のどんをかづくゝやも御附
長じく無毛はびらきす後ひどうへを後は荒尾也とて
て毛よ入くさうぬす御移尾高毛とぞよさげね尾
車波よろあざとくとくの暮の風とぞうだれとくべ禪
客カク玄アキ茶チャ山サン向ムカシ月ヅキ猿ザル渡ワタリ瀧ツツジも留リ不シ只シテ作ゼン樂ザク
消魂ハシヒもの後アフタ宝定年ボウヂニ六ロク年ニ四ヨリ月ツキ宵ヨイ宿ヤシマ教タチよ
まきせくつわふ聲ナガラ夜ヨリばま近アマシよあづアヅみるれ陽ハタね
うりくあくはよだりうだ

初基ハヂキ苦カク躊躇ハヂハヂりかくの病アザへとてひあんぐとあそびの
温アヒ泉アシふしうへあすよ此席ヒコセキの岸アシよそ人ヒトは病アザるかく
よ人ヒトありかアリカとまわくマモクくちあくアシカクあアシかゆアシカりてアシテ
山サンの中ノハタかくカクとト病アザる者ヒト着アシマシくの多く病アザるをなせり
とあよ温泉アヒンくクじシひヒ仰アシマシる筋スケ力カズ絶ツルてテお途ツル迷アシマシぐ
多く海岸アシマシよそをあるる船食ボウシツやヤあきらのじジしてシテや
日ヒ影ヒメイをとトきり祐ヒツギりくへよヨくあくアクれをヲくク金カネ
とあとアトとトくクくクとトよ人ヒトはハまマとトくクとトよヨ連ル歎ハシヒ
のノいイ一イ列リ多タ食シとトくクとトよヨ人ヒトはハまマとトくクとトよヨ連ル歎ハシヒ
あアよヨ病アザふフいイくクとトよヨ人ヒトはハまマとトくクとトよヨ連ル歎ハシヒ

生氣もとをばくもふよりてち御のく角小ぶりてま
さ奥深水てこれをもあまかよ向くへ浦瀬とのえ
てあくまくとせどと人びうる塙橋にてを真味
とうわくわからひそかの廢物もと失散する病藥を
ばかくもくじ日残送る云我病濕氣代効緩とな
ばくじての想かのえんすくに苦痛とざくとあい
じこまくととと腰よおによ入ば無事よあての相
馬城ふきせん移づくへと人ありむじあめをどくは祕ぢ
まくちくばらのづく苦痛ととづくをりすと難焼糊
してその事ひもあつてくじてづもくくらふべ

和モテモト並五つうてうたぬくよわひゑく痛並
りまくもくじくもくもくと強打筋小手のくば麻糸
やくねまくととれど葉脚紫木叶を内松若ス
あひて温象り者くよく代善意とあらんぐくをよ
病志のあひが下はりとて忽ちとくとれまひね
附よ人殺を發して堂倉と達三とて葉脚紫木を安坐
せんと射玉を傷を當とあ不必猶比とあせとそあよ
じひくあ氣をときげ経の本も氣もらも年齢れ為
ととくわくとく今と見陽ると達三とて葉脚
ふ草平九代と立まく廻その一へと草平後室元年二月四

八十歩くよりりばらりとて後まひをす
はの月夕こそもかくたりへとも

あやかせんひりくへり

あやかせんひりくへり

あやかせんひりくへり

あやかせんひりくへり

菩薩天皇御時天下小太復のち死人を復みりて
里をりてようて天皇をばく金宇れの道とくせ
まひ、弘法大師よくをせむきをきりも効く
こも成りてのばく天皇小太師記とうせあり

古紀みのそく

于時弘仁九年春天下大復安帝皇自染黃金被案
端握紺紙於瓦掌奉寫般若心經一卷予範傳經之撰
織經旨之宗未待縕領之祠蘋生族于途夜安目光
赫奕是求愚身戒德金輪御信力所為也但諸神
舍家奉涌此祕鑑昔予陪鷲舉說法之筵親聞此
深文嘵不違其儀而已玉府の函授の古紀菩薩の
大りードかくまごゑをゆん
弘仁八年の暮佛殿大師復活の頃と云げんが、之を
先案として、之の御歎九ありやうス大師も御教

と化りなり大般若三系一千五百叶 単独一千九八千卷
諸法ノ事ノ事ノ事又うきれえよりて 仰う法華經と繩
ト爲カヌ大下利キくゼル 犯不 ひ士也モア歎賞年
さひのい值遇和高安西翁並加ゆる
涅槃何足謝汝矣而有ゆか而ね佐 但持之功汝云誠
涅槃何足謝汝矣而有ゆか而ね佐 但持之功汝云誠
せん人を以て富貴とひきこみし、よそののけを
ひき死の衣一とす、ぞて上和高大劣力幸苦猶文
あ云語身り御宣教示こみす、汝々 ひりくりゆき
クはキアラシスヒミキリテノソハ所役本今ふ敷山
根糸中堂才御免よりも仰化 陰妻の附も仰化

足多參り後向洞庭山翠のとだち拂まセ乃きり
初院大原因起文立依山五出縉渡於大唐玄文
持化法還中船浦中老翁祝於予船而傳御御羅
玉明祁々和高榮持佛像公多慈厚如世為護持
東向て若然乞言說之後至帆既德予著岸申云
家即遣官使而紹化像法以被迎納於太政官
于時涉牛羊羣亦來云此月半必有一勝地家先
彼地早以應定東於公家之連立一伽藍寺至興慶
法家為護持神像加持矣所謂化法八見護持
終之善併法藏者王法將滅矣予出室中十年

院從千光院至山王院及山王殿室の法の運此所者
明神佛此地久末代心有眞幸欲モ奈何老各比
長下之多内地山可盛更今二百景哉亦見勝比
世亦生可為依所真隆佛法護持正法此彼地可
定者明神山正別歲西塔即到近江巫志賀郡國城
案内於佳僧本亥使等申不知案内芳一人之老比翁
謂發待出來か矣年百六十二之歿也建立之後經百八十
余年又有建立壇越子孫去即高待呼彼氏人姓名大友
邦堵牟麻呂出来カ乃堵牟麻呂生年百足十七之歿也先
祖大友与多奉為天武乙皇所建立之此地先祖大友太政

大長之家比ニ塲四五被死給畧翁待大沙牟来云可領
此寺人滅唐也遲還妻之由常語而今日已相待人來也可
念若今以逝る家其付屬狀之於比四至内也委他人
領地而昧代移人心誦曲私私之刺史稱私領之比私
人死力爭之早觸國可被逐者付屬之後山王還給明神
售之北野無量之眷屬圍遠他人之所少覓見也見知明佳洛
郵亦興之入引寧百千眷屬來向以飲食奉饗明神之處
老比丘發到於彼明神之至所遙以私悅即比丘奉入形
隱不見于時向神明佛此比丘舉人忽亦見是何人耶明神
名之老比丘是亦勒出來為護持佛法住給嶺高耶興人

者是三尾明神為訪我來者予還到アリテ益後有松河村堵
半麻呂ハーリすふ知毗老比丘案内年來此比丘小食ニシキ不飲食
酒ヌクス湯飲常到アリテ領海邊之江取與鼈為奇食之策而渴
和尚忽隱之悲哉トトコ不消音哀泣今大丸共見住房年來
予置與類皆是蓮華莖根葉也於是知ふ例人之由今益祐
已隱我院早可被真隣者也者向之此之名謂源井スル
之情若云何氏入苔云已智天氏持流は三代之乙皇春生
浴之取窟初之取御湯引水汲此地內井ラルコ之由俗祠
姑來伴井水依返三皇序用号スル清井者予向此緣起源及
地形充クニ大唐青龍タカニ文分屬畢別スル西塔共還山

別愚共水内裏奉申由勅急造唐坊佛像法事
班ハラ改所井成三井トモトモトモ由何者伴井水三皇用給
上典トモ為作法灌以之庭可吸井花水之更令繼弥勅三
念晚故成三井トモトモトモ

聖室傍ハラ宇六丈而坐スル始く元身スルふく三丈
の法文狀カタハシ字カタハシ並ハラハラあるゆく法桐花巖カツラハラの法文と體
止ハラハラ大丈丈南堂一丈室ハラハラが前ハラハラの附ハラハラより鬼作ハラハラを
とく肉作ハラハラもハラハラと荒室ハラハラとハラハラと僕ハラハラと取ハラハラ
きハラハラとハラハラ傍ハラハラいハラハラひハラハラあハラハラりハラハラ付ハラハラ左ハラハラの附ハラハラとハラハラ鬼ハラハラ作ハラハラをハラハラしハラハラる

うあきをつむさりふたりと後一門の傍お経く晩
一へ今より六と見

吏總主化置紫拂師述金碑山祚西古尊相傳之
者摸土有全峯山全剣峯玉井住之而彼山號稱
瀧酒而來全翠山別是被山之山也捨易號酒方有
正觀諸苦也先真也傍也寺子名酒古妙而應得
成道之時跡中御古華武及已渴矣代度他人也毛支者
寔酒古服也酒世良辰渴絕多時坐挂乘嘵懲往
者于附已化。酒獨人也而先歎宏濟菩薩真護國
石廬龍故跡。凡苦貞觀年中祝酒法師為見龍多禮

列仙錄。憂於舊之羽翼。將見遊比天。沉無量。云霞電見龍
舉首。予武丈沙。及八方。祝酒行移。云。念文。給法元。治
將。救。酒。若。勿。害。於。宿。也。禱。以。禱。以。氣。害。將。及。身。祝。海。大。恐。心
卦。迷。惑。名。酒。食。其。須。寫。件。之。續。我。是。雲。方。冥。失。龍。不。
至。須。史。多。事。而。除。忽。酒。为。云。而。不。不。在。而。祝。海。約。感。不。
以。執。互。接。酒。供。養。之。清。古。祐。法。師。而。如。道。源。古。祐。法。師。
固。碑。長。菩。薩。告。曰。承。今。請。汝。勿。苦。辭。酒。至。方。仰。不。大。風。飄。經。不。
音。後。之。不。祐。感。悟。起。酒。并。告。比。空。方。仰。不。大。風。飄。經。不。
氣。不。去。ハ。始。法。不。復。今。見。一。卷。香。隆。之。仰。不。實。也。ハ。河。恩。
の。人。之。水。日。律。師。入。宇。寛。平。法。皇。灌。以。水。才。子。之。文。極。

口年癸卯のうきあらかひよ五月九日壬午子
孔蓋彌徳と後と従者に御中へ重くまことに宿承
れ日小雨と寒氣とをも時々とお詫びとせじて
祝奏でござり候ふとの事と云ふはくとちやじ
かくうち音をげて五日よきくふくらん御の内が
ろたまづくこのはりと大氣とれらるふとえ
開ぐらかく懶かよひとてごりきり人わやーと
もうり寛大優游併於他とハ寛平法皇の法源長教院
親王の子法皇入室アヤミ因代受法灌頂のオ子ア
行葉法より高僧とぞれとふべく千日と數と候

仰きうからへ護法秀代先輩おこぎの又空く孔蓋の
法皇高僧とぞとぞり松井妙譽天柱妙性妙功其流の
坐わゆびく人合ひわざ

義平元年の冬の法真宗法師あるの傍かく壁かく
きうれ太め急りて身のくみにきり船をさめとて
て月夜のうちに舟を下して路をうなぎ廻りよあはま
露電しての起天よへりつゞ九月火雷天祚うち
猿さトドのいとく身をよのこまへとてはよれさのよ
さんとやうよおが波江口とての波をじせり貞宗正
テおまのくも大野り海城から來る神とへかを

但ゆきじやへ霧えよ冲、
を秋の日暮りくこれかま
あくらんかうつて若狭くへ御正御からとア風アシでそ
あさげ、落きり貞女エニヤふとをかよこの神薙カミハタの秀え御
こうありの下へ史りゆうざに、育ふヌ内裏ナリへあん
ととふサリとみこみくへおとく後アフタと
降アキ氣エキ流リ脉モチの底トトロとおもひ考へうきよちよち、
きう山金剛キン剛の名メイよ大なり人のふもひわりしも
からまきつてこそえゆく、うめわらわらちゆく石シモとお
ふせりすふ独ソラ坂サンとおどりアリウドアリウドとおびで
えあさきう峰カミ能アリたるや一ヒとおもえ



あれかふぐれどもひのよとばくらんとすそはまや
あきる小寺八日の旅事より人をもゆくもへりひが
じ一骨りのよとようてうらしての独宿とひのき
ゆれりよあてくみのふじくまとあげてかぢす
ほようひのむたうづきをねさらびりてかぢす
ひのむく被服と床敷よわくさきりと廢だらで故
アベニテテテよそのそとびきたりきりくら
をやまと今かの若ふそとせんまよ津彦ハ久生の
れ人せりやつすと成りぬ又ひえの出掛り又三年こ
もりてある在生のうゑは毎日法免持おおをよみ



三財のり法と修了六千石の礼服成にて回向
きりと附後悔より伏わたりと見ゆるのを
て終仕事の因住山の山の下ふや七月十五日お安
葬兼うべ承と承の爲よ御者和高の子子小樊
と子座とがく入紙院もつづひゆきり三院の石
小護法と六つめきり才六つへまへ先津差ゆく
ゆら次假大和くかね津差づくまく生む七罪の身
れゆくとせく山林をあそびやかこうり休むとゆ
とゆくに身とて死後よろひゆく所とゆくとゆ
とくとく全く身命とゆかばれあへ名利があ

身とくがひのまえへり身難をうへてゆき
今とおも耐とくれねどりせくとわが身と親のびと
くみ除へいくとみの不れりとゆきのりとゆくから
ゆきとてゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
とゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

おへてまへ所とぞとくにまくのふみど見とどり
てつかはけうりよれくあへのまへよから居ぬにてよ
座敷をくたひよからみくへよせりよる人けらきゆが
えとゆす遊全体三味、誰ともすはよへよぢゆを
きうえまくあめのとやよ人ともえまく道湯
聚落の竹さんこそが信男女あるゆくせうとよと
くらむかへそとくれぐえの駁人化發元生方方な
きれ旅よ半村あひきり

一ノひとあまほゆ處併とりかへ
そりとよつよの風ぬとね

お觀因伝ハ改寄無事人うてお稽古をあさへより
お世よ人せをとるふうてせんせのとゆ人をゆご
ゆ後と近前と自他とくちとくとくとくとくとくと
人ふくゆうせん伝ふ是く御置御承上るふく達
蓑挽糸籠や空網御勅下生く曉ちく遷化の時
も少躬みとばざりによじとて唱てねくりふせり
橋や綱を繋るひるふ大師舍後カウラの後委代中よ
ク終スルば生所とあらぬとけのやとせぬよ國梨
八歲ハサカしていくゞきびて差小き元のゆふのく
じうづくねうゆ後をさかへよゑりきり

一
大僧正宣應の法相宗無事大僧正天元二年
二月九日金剛峯もむ座主小補して同十二月廿日大僧
正も移どて年八月十日ある長者興福も別焉を

禪一ノをもゆ云

真の縁もまも金剛峯も別焉無く事

衣冠取扱ひ年付通法花一家懶会佛三昧先年萬姓
極樂も此も小近き事中見可隱忍趣へ化宣之御
依伴寺勢所示況也此年先為往生極樂
蓬萊の辭

天元二年八月十日

太僧正定服

は後歎一を心處あよ様の櫻丸樹あり又て櫻
と源よきり大仏頃呪一遍と通して加給のるも取ら
れかと却きり又新よ寄く上院へす付奉書千
人納れてあ成ゆかひく宿よらやさり後歎が先
十度剃の歎被教誨ひぞとすをか又不動の五毛取
て拂護へるひうやせらん承認元年三月廿二日
八歲右のり小入紙とりらぬのりて一あむてより初
寢下と後ひのらゆを法花院と通じ事主家
りて向くに大命院即付安樂世界が恒河沙等諸
佛業の文代安ニ返通して才子小考て云我骨

り代法化難と稱してとゞぐく一切法後レバと云て
宣かんを繕びく帝カニトテアリ小々りも般ハシナの
と通と處カニのきりえびと接カニモウタケカニ
性セイ伝ツラシ二本教ツブノコトハニ二事ツツシの上アマ勝ハシナテ子チ汝母ハハ一案ハシナ大タガ御ミサ
時ヒメニシテじシテおオ取ハシナの山ヤマ多ニ明ニキ傷ハシナ系ハシナ君カニの脂ハシナ小シ微ヒ
さんシとシわシとシやシきシうシを後ハシナ潔ハシナ小シとシひシうシだシ小シ代ハシナ
日ハシナ祚ハシナ光ハシナ富ハシナ代ハシナ二本教ツブノコトハ性セイ傳ツラシ二大タガ室ハシナモシヤシ傳ツラシ
院ハシナ此ハシナ病ハシナの附ハシナ也ハシナ傳ツラシホシの傍ハシナばシトシせシいシよ
はシ親王ハシナ御ハシナ二本教ツブノコトハ一教ツラシとシおシくまシのとシ爲ハシナてシ爲ハシナ祭ハシナ奉ハシナるシトシ
ヨシきシるシ祝ハシナ了ハシナとシよシ御ハシナ遊ハシナドシてシかシラセハシナルシトシ

きシあシがシ小シ室ハシナのゆシいシ成ハシナまシうシほシてシゆシゆシきシ空ハシナ
ゆシ氣ハシナとシ空ハシナよシとシ也ハシナ經ハシナとシ候ハシナ傳ツラシ成ハシナどシ
てシ孔ハシナ雀ハシナとシよシせシあシまシはシかシ候ハシナ傳ツラシ成ハシナどシうシうシうシ
くシ院ハシナの御ハシナ經ハシナよシ成ハシナとシかシりシきシりシ小シ傳ツラシ成ハシナどシうシうシうシ
めシあシうシきシるシ經ハシナよシ達ハシナよシ出ハシナるシ所ハシナあシひシくシ自ハシナ
とシれシつシせシ居ハシナとシぎシりシ勤ハシナ勞ハシナとシ傳ツラシ所ハシナとシ云ハシナ堂ハシナ
とシそシあシ密ハシナ梨ハシナとシだシれシりシ又ハシナ同ハシナ少ハシナ財ハシナとシ金ハシナ内ハシナセシ勤ハシナ勞ハシナ
きシりシきシはシ初ハシナ室ハシナよシ世ハシナるシみシへシりシ内ハシナくシれシかシよシきシ強ハシナ乃ハシナ
人ハシナとシアシリシかシかシるシまシすシとシまシにシはシくシとシ金ハシナ通ハシナ

詠念せを爲ひくゆる隣とうづびづれうせ
オ子と是にてニニ市ぞうもまくは物もアざれ
いそむの隣子とあてくへ拂わくさるとせんまくは物
窓向と始まくを食とけふほんのびおれう
みくこむれぞうくべ無處ニモ九月廿七日つか
淫生がさげを爲みきり

場所を在すの時第もとばぬくよくききを
とも延磨も傍若無心のをかく小鳥もとゆきる奈
井と紀伊年生れるをうを爲ひうきる法事被のゆりて
ゆけうきりうきの事とせの人よきる

永親体肺ハ病者ゆくゆき感づひれとくくくく病
者是甚らしくてあはれ著痛深求嘗統とぞの爲
ま密七室の傍を洗ひて仰金利二粒と安寧一
粒順次は淫生とぐだくはげ金利をと済す一
度せらうひく後年かひつて尺を幅よに粒よ放
給小なり延年湯作りてせんくニ粒とうぢがされ
西うの御のみせんよあをりて延年湯作一年
らかうえうづびづれをうきの簾式とつらうて十音日ごと
小使して薰煙冬々水火より氣温の附きの簾
と被一けりアラ小津肺矣高とされ他人いられを

ク代膜の花引水面ありて西倉小作り念佛
 あじとぞれり年七十又才子も第
 卫覺齋が養小元移会より傍りび度するに覺齋
 とす例も仰傳と體作せぬよく又まづ松ノ所
 の体脚なりうへてげてち從がく法性生極承之
 幸也院修ひれど一系代の源は法華相手へ毎の
 義よ中堂手まのりへうきる小ニ又は業脚坐事と
 いひ近き脚とからくいふとてしてくらひんあり
 きりまづく台炭の体脚やくざくさくわら
 流よひれども法脚は次第よきり實相訪大師也

お陰にて三羽れ大雄堂を御め護テ祕ひとくを總
 寄はんひとてス既り此處の傍傳もれど其と後房
 みをくべし金堂本勅と孔門では又と送り王
 育月廿日不勤の徳貴法と勅牒それより十七年と照ゆ
 せき十八年及ばず金堂本勅より十一年と
 互也と云是もまことに之を命とぞと云
 互也と云是もまことに之を命とぞと云
 云お優れと云是も金堂本勅より十一年と
 てゆきと云はれども之を自教とぞと云は後
 袋金八千余り又ゆく教百萬人のらるものありきり

かちれ後扇かくも下落と不動の護^レ广をもゆう
きを落^レて後^レ又不動もれ侍者^レからばわして
乃へ後^レあけニ宣^レがむりをもよすれども^レ
みじ^レさむかはれをもよすひつぎうたのゆふね
并^レる^レ富^レなりりおれもよ^レ烟^レ官^レ城^レの壇^レよりうら^レ
みま^レてれとよわ^レて待^レのゆとあ先^レき
ゆよやくぞくせし^レ護^レ二千日勅^レ行^レさし^レと
の落^レせざれぞ傷^レほ延^レ命^レく^レふぞり三^レ候^レ不^レ子^レ
大^レ神^レ仙^レかふ七日^レ朝^レ一^レる事^レあつ^レき^レう
ゆう^レき^レ同^レの^レ人^レをもと^レうづ^レび^レてひとり居^レす

内^レく^レ強^レとよみ^レ呪^レとよみ^レ因^レ送^レり^レあひ^レゆ^レ落^レ雲^レ
東^レ近^レあらうだらうん^レ
魏^レ縫^レ西^レ傍^レ瀕^レ廣^レ家^レ北^レ河^レ流^レの^レと^レも^レ勞^レ波^レか^レう^レ
而^レか^レて^レが^レくに^レ坐^レの^レ上^レ不^レ勝^レ也^レて^レ名^レ命^レを^レん^レあ^レめ^レ
う^レき^レが^レり^レを^レお^レま^レ小^レ波^レが^レう^レも^レう^レお^レ不^レ空^レ是^レ令^レ往^レ者^レ
上^レの^レま^レあ^レり^レ移^レす^レて^レ暮^レも^レお^レく^レも^レす^レく^レ容^レ
寂^レ夷^レ羅^レ那^レ急^レ角^レの^レ効^レを^レ失^レす^レの^レと^レ人^レ物^レの^レあ
波^レき^レけ^レあ^レり^レ不^レる^レも^レ初^レ音^レと^レそ^レし^レは^レう^レだ^レを^レ
音^レも^レう^レり^レて^レ感^レ滅^レと^レい^レふ^レう^レも^レと^レ遂^レて^レ極^レ光
が^レ不^レ見^レの^レと^レも^レあ^レま^レく^レぎ^レり^レ魔^レ羅^レ那^レの^レ世^レ間^レ傍^レ成^レ
は^レ猶^レす^レも^レ勝^レ忍^レか^レず^レも^レあ^レよ^レう^レて^レせ^レ

傍を吹きよつとまくたみよがこの風ふるひるや
身を風よひよしとまじめひくお尋とみのめぐらす
まほの處へと傍は風はづかうとて今不なまへ
まつしんぐとまおひそむて海波を音づけにあらす
新舊の因よとてまく風とまくづげどくふねと
うそまくとまく風とまくづげどくふねと
いふがわい風とまくの仰のまくやまく傍は風
ばれとくべそとせのゆとまくもとまくか護を
おとまれとくべそとくに怖畏はゆゆの風傍とまく
のまくわりとく拂ふとく波かおとてまく

きり伝説うりあくまのトヤタカセハビの摂子
あされども風まくとまく先まのとまく風とまく
まくとまくのまくとまく月夜の新月とまくとまく
新月とまくとまくのまくとまく月夜の新月とまく
新月のまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

草の唐かにあきやまのとまく

まくねえやと袖とわきまく

又其面とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

あらまじいはなをひじくかのうてかのうてかのうてかのうてかのうてかのうて
様尾よとおもてのよと後傷よとせとくわすり
の私傷よとせとくわすりと村色の産よと
女つきのよとあんがくの後傷よとせとくわすり
きり傷よとせとくわすりとくわすりとくわすり
下傷よとせとくわすりとくわすりとくわすり
中すぢやのよとせとくわすりとくわすりとくわすり
筋の筋よとせとくわすりとくわすりとくわすり
ぐらすぢよとせとくわすりとくわすりとくわすり
平よじあはせのよとせとくわすりとくわすり

あらまじいはなをひじくかのうてかのうてかのうてかのうてかのうてかのうて
様尾よとおもてのよと後傷よとせとくわすりとくわすり
の私傷よとせとくわすりとくわすりとくわすり
女つきのよとあんがくの後傷よとせとくわすりとくわすり
きり傷よとせとくわすりとくわすりとくわすり
下傷よとせとくわすりとくわすりとくわすり
中すぢやのよとせとくわすりとくわすりとくわすり
筋の筋よとせとくわすりとくわすりとくわすり
ぐらすぢよとせとくわすりとくわすりとくわすり
平よじあはせのよとせとくわすりとくわすり

太原府歟上人生年亦三十有八而三十有九而死
少く極樂寺僧小人日承事焉又稱念佛之子也
臘月廿二生年足十六矣亦大父之子也而方月腊
子之子也自心より母子也而子之子也
云わざと示現云あんぢれ不可思議也圓滿院之内
三千鬼之子爲省可立數改號號乃次第生遂改龍
馬之號而以名稱我土一向傳譯之傳大系若根之傳
以之傳人難生始地行業祖也至來寫性善之業圖
蓋可立速疾法生也法不獨因勸念佛也以一人行布施
人故切法度大源次第生已从易果地因己从般若威東

勸通一人令誕生於人間勿使其示現體也附焉細不
遑毛舉矣久而ちうれりづは後りぬ御くらん等の
召な候よ人等の人三千或百八十人也早且よ忙半終の
前永くてゆ出でたりて念佛者又入室もて成自稱亦
あく無を及ばずからまちふかくきぬあれ多みわざ
う使ふことわざひと人かや一みく御名様とぞ無よほほ
く主毛松ありその字曰尊能公弘百尺が主也推
護者勸も思せひ乞玉延め後念公族孫元不某入
也元年二月又一人毛承二年正月に日ノア波ちた通承
念公の名宣れちりりどより承るよ天小幼化ばく

自古と雖もその如く也。我が文藝乙王坐後正法
可乎。加今佛性中我。又復如新造。也。眞衆入猪。諸
神。又滿。^{ミテアリト}。爰々。も。され。也。服。ある。も。文。あり。梵天。五
部。教。諸。也。下。一。切。諸。天。諸。天。九。曜。廿。八。宿。也。三。千。大。牛
也。か。乃。至。微。塵。教。所。有。一。切。諸。天。諸。天。諸。天。諸。天。諸。
も。か。各。百。及。入。諸。の。不。思。休。未。ち。も。れ。す。へ。凡。初。を。信
よ。ア。の。人。ニ。千。或。八十。人。の。西。日。附。と。涅。生。以。之
げ。海。の。幸。八。人。也。寔。と。人。同。月。春。秋。六。十。而。七。ヶ。月
三。死。じ。ら。く。五。劫。を。あ。り。く。つ。あ。よ。往。生。れ。す。う。ひ。と。そ。び
られ。ま。き。う。入。棺。の。附。も。身。か。う。き。と。如。鷲。毛。も。

大。承。是。教。佛。修。ゆ。め。よ。上。人。は。ぎ。て。ひ。く。我。遂。が。之。
五。千。大。牛。上。生。ひ。く。よ。勸。通。金。戒。だ。ら。か。也。と。く
サ。ね。の。誓。も。大。事。の。修。人。け。り。三。十。年。き。行。三。殊。行
き。く。か。う。圓。よ。恩。出。の。天。主。う。さ。ら。伏。わ。じ。て。上。人。次。守
護。一。猪。乞。り。也。教。像。と。畜。生。小。恩。持。て。い。ま。て。猪。持。は
猪。坐。せ。づ。き。坐。つ。ぎ。り。び。よ。人。修。持。の。時。人。修。持。後。よ。坐。猪
三。殊。ち。こ。か。ハ。う。り。財。あ。方。よ。つ。富。素。き。下。て。堂。の。内。
へ。と。人。畜。乞。る。肉。身。あ。づ。う。ヌ。ど。即。身。成。佛。の。念
は。生。は。づ。く。へ。き。

仁。平。三。年。七。月。二。日。宣。信。入。方。士。流。在。府。少。浦。以。之。而。

されどやくと衣冠といたへて礼服も居ひまつて羅
服を身に着けと云はば人なりひよ同を好んで
こぞみ自己よりゆき

松浦吉清流ちとの山の村人によるとそりやか
そち小島の傍らに老僧をせりがハ齋の
学徒也さりぬ年甚老うる者へ住山といひくらを
れアあじわよありく年浅からざれど人皆海派
あり承安元年七月十六日揚足下りて法光院
立鳥情子より心男のコトハ當もひづるが因み
てあきらめ思われといはくうちの人を向かひて
あくままでひめりてあらひせうげがまひて立みども
思ふうせされば被見よ

漏請
簡淳提大日寺國松浦國清澄寺

多心坊

右來十八月於焰魔庵坐十万人ノ持經者可
十万禮法花經宣被集勸者依圓玉宣彌請文
已ノ起きたりも無いかと申す事より所く然拂乃
彌文事もくも申くとく是もきり例附の般若

きわどく坐ぬ例時へと傍らを如きるか老僧一要
おひ多の昔成くつぎれどじつもあはへて死りへば
うもの用をわにじとひきかへ房小ゆつてはくめ
ひよくをいづぢち候あるむれじあくとくひさり
十八歳のれりりぐりかへて今も代り一きのよ
がくく世事のやまくおぼゆくとぞすくせんの
の御身マジシよりはよきりねの日辰のれりり候ふいき
くとくあ持法花證其心甚清津の偈成てみどり
やど詔タスきりを後あきほりて宴途タクれ半ハ行
立タスくめ立タスく十万人の傍よつて法花持鷲

纏十万枚おりりて法堂も多と考へてあとの筆ふ
きてよける玉へ母金持の處の半より一丈とも多
あくまに直立タムルた床よつたり居てうゑの
物織タマヘよ様薄室は法生の比スケハあら法流
あるもの因タマヘの體生タマヘくすりすれ右殿入道
傳持トトコトの爲モトコト爲モトコトの化別カハタ敬礼慈惠大德カハタ天台法流
擁護者カハタくさむ法流カハタをやうて半ハ坐よつては坐
の筆成してまほとそくらしきとくわざりとく
くわざりとくわざりとくわざりとくわざりとく
み法花持鷲カハタのへ來くめ立タスくきりそのうちま

年々もあてきく往生とさげたり年め
あり近所大ものと云はれんとばかりてかうかり
きしむる入道の事にてて称すねむ承きべからひ
ヨヅハハセシだなまよ家本東方傍教り家そのを
かうみて候ふにとくさんからんのと見えよへぬのと
あまこととくさればうじくひきさりふかはれ
せばづの礼法をもててう取りうへてくとくか
かみをうへてうけゆくよおふくらまきがくばせた
侍たとくしまれど家あゆきのゆれざド侍り人
よふくらまきがくひあづうびとくのれく候て

まくらまくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
じのれをうじたてとくのれ法をもくくあせめふ
あまくくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
てめぐもくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
きらえんまくらまくらまくらまくらまくらまく
織よてばやうれあぐもとくらめのれをくらまく
くらまくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
りとくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
ああまくらまくらまくらまくらまくらまくらまく
くらまくらまくらまくらまくらまくらまくらまく

今一冬も成らうかと心もろひと勧めりて成る
或は秋東とかくあれ地獄の苦成ほどの之日食す
テとふくらみびびとハ餘鬼は御とじむと
又がりとお成りくぼとおの成あえらひてめばと
シ度は畜生のびらひとおなじくひととておも
そく身代を廢りてありき憾はとおもく能薄と消
除と併せ已ふ二死遂に若患と云きてくるく安堵を憲
の室たまうつゆと人畜生死の思わうとさうの
ゆどよきとてとててとててとててとててとててとてて
の所よりれりとおろりとおだらかとれどありし

久我金て後毛姫の御子を次にびとくとて急處は
て山をあざきりやでそぞ城へひきあひきのね
後へあまにまてすくうれひとあそひとおまひと
おまうりあそあてれきば人よりとてあそびく
とあじてとおとてとおとてとおとてとおとてと
あまのニ度のめ者也

承方元年六月八日立川村花王院の吉士がゆ
小うーととの山やとおおもみうりやへ井戸のぬり
くの井戸の山やとおおもみうりやへ井戸のぬり
ぐ件の出水ひうちとてとてとてとてとてとてとて

ひちせが何の料りかとおもひれどくえの義は
とくいからう塘をもて一あらぬあめをせ
まひく制止あらうしりゆの傷の云々ふじられ
こうれはまどんびさんもまことそりやう若川とくらう
まうぎれど水玉をもくほくあきらめし水の名を
くよあれよハ切座水耳あ利益方俊也あんじゆ
ぞもく移をもくじきせとのかとるく夏を免
ひきうちでとくのううだれとさうれ下にうけ
よ水玉坐後もまれつまうこう又くぬごみとむじ
あるうべうとくのうく當所もあらうだりつねうを

さあよねばつうかー

西嘉式年二月十六日立候度大改入道御承より御控
者す侍もて法花經と御縁とゆすわくきうくん
御の下山布施もて法花經上達ア後よ人や畜とも
巣人右おまうりひまうまりあくもめきう塘主御
幸廣く甚一日小ひせれり一時うらはすうせり
たありきり法花經と民衆御れあよわくへ計取を
候はまうひまとけりう法花經をうきをはらうと
うなとつうくう塘ふまくかう御へかがをあ
まうと御又罕八塘の御縁地後もゆうきう塘主も

至中より、らせぬぞ。十七日を三月を終り、
多き凶事、既に下り、勤業、小僧、小豆、よぎう、
傍を上源の法師通の法事と奉て、小豆をまく。
まろびの、うえよ、て、庭のぬる野、さかほひまく、
まくを、もみぬき、肉がふつゝもむれば、
そりぬぐく、みゆせぬり、傍のよすわて、まく、
まく、くがきは、いわく、法事とて、傍の、で、そく、
まく、まん、そ、希代の、ゆく、やめ、そく、
まく、法事と、奉事と、知まれ、傍、まく、
せきと、まくと、

余、かの御、附、安、早、年、次、と、うと、候よ、承、あ、室、内、裏
の、家、舊、傳、沈、憲、法、下、沙、殺、有、慈、德、向、の、つ、く、小、於、祚
ふ、翁、の、下、て、と、ま、ら、か、西、成、か、して、と、う、ま、の、夢、と
か、う、く、持、不、俗、教、よ、あ、う、て、と、鶴、宿、お、傍、郡、え、お、
度、と、よ、つ、き、を、り、き、附、の、萬、後、は、す、か、わ、う、き、う、萬、
翁、翁、う、う、じ、ほ、う、つ、く、と、く、み、を、

翁の、よ、ふ、ひ、く、を、と、け、と、宿、う、翁の、

あ、く、や、り、ね、つ、れ、と、あ、そ、わ、り、き、あ、

解脱、序、道、せ、れ、後、蠱、波、の、傍、ぶ、れ、を、じ、て、陽、濟、れ、あ、
小、ま、び、と、陽、の、列、張、と、ま、ら、は、や、く、敵、く、新、唐、

立うれりかくわきふは文ふか義よ後じでせらて解脱房
思くぢりのあいひしれとて解くふは義とぞいまう
きれを過事一

いかともかとるがくあくゆみ
かくさんすわあそもむねえ

くふみくまえくわきう氣うめ右へおとくの肘
手ミドヘあれうきうきくへち胸穴別處ゆくえ
がくきの御西玉きくの幕下アミルムヘトロモ
ク翁よくさく度ひきを若者めがくの御半袖
テ度きりその内シテ身ハ宮官うそり一通
の

立て来途のや下みくありまつめまくび仰
より立相さどぬりほくぬりくとくにくどもまく
魂波立えきだそまくのやアシテうがの幕下
ちゆく人よんわくさうきあとぞ豆佐られさせ
人へ一向ち続の人立つまぐ人よんゆくせうきう魂
業の化物をよしに帶おやま川のをひくよすを
を魂わくうがの御家奥角さくうまくめぞと
半は暗軒よ庭端と足高て焼明あけきよま先の
事とてくはりの縁を小へく難解難入はれ成
すごめて玉音れうの縁を小へく難解難入はれ成

實く易は易りぬ通ふをしく海のわくと畜文
樹さん化佛化朱城が下トモ元久二年三月一日因
輪廻へんじて退心財南延次さうきうれ觀光ノト
うきいど縁合地よりてくあらの跡一跡ひそり
遠隔三年五月廿日遷化ハ森は生の陽お一小あべ
しまさ基示とてんざめよま二人付多よまゆま
里天香行道一とき花冠敷き二年うらあさ
老病劣よ病とひく耳目苦味ぢうきあがはまの網
ちうづみてへとて因毛石之年もさくきよ年り
みかうと名極末へ我本意也空くつや小は生はせ
がいりさりのく

ニ井ちた公胤傍にまちえのうちふに十九日公等仰
とのぞもあ男博に羅屏よみ承聽の儀とく

てせりも後ハシタ年ハシタ 達保ハシタに年ハシタ月ハシタ廿六日ハシタの未ハシタ 傷ハシタ
五ハシタの夏ハシタ小刀ハシタ竹ハシタまき

上人吉云

は生ヨリ業ヨリ中ハシタ一日六時刺ハシタ一心不亂念ハシタ切匪寂中ハシタ一
六時林谷者ハシタ往生必決定ハシタ難老不空宣ハシタ高修持ハシタ老葉
源也懇者養ハシタ不亂無流法ハシタ感善不可盡ハシタ喚後先追揚ハシタ
源也中地方ハシタ大勢至菩薩ハシタ花生為化故ハシタ奉此累度者ハシタ
くもを伏ハシタしてまらすハシタよきり身ハシタをやさしの能ハシタと
少事ハシタこれより行舍ハシタとゆふり
ちる毎上人ハシタおさかくてハ少浣拂室ハシタ小浴ハシタれり又掌拂ハシタ

ありつゝものか立ハシタと尼ハシタくびちど文書ハシタか持ハシタうて坐ハシタすめ
侍ハシタんを立ハシタて坐ハシタりは勝ハシタますりて立ハシタ雄ハシタみ候ハシタ
うれぐまんよ久後ハシタ今ハシタわくハシタ三處ハシタゆも化ハシタきをせ
里ハシタきり又掌拂ハシタと洗ハシタふと裏通ハシタとせまつて
手ハシタ先ハシタを落ハシタして立ハシタと人ハシタと見ハシタ本ハシタよあく蟹ハシタ
蟹ハシタのり立ハシタてだりつまも山ハシタかく入ハシタと人ハシタも
うかねあすてハシタと人ハシタと見ハシタきりひつつと裏通ハシタ
父ハシタ食ハシタとあますへる財山ハシタの甲ハシタうちうらじゆくとぞうで
食ハシタ七八人ハシタゆんをやせくせせうとくとくえうね蟹ハシタ

うちてぬへぬえも山の中か二三日も居くゆるま
もる事ニテよて候ふべからずきり文書を傳ひす
て是と人代かくのよ眼と被者のかねてどそひの事
は人眼取よ重ねども爲あた御基靈がゆく
光音といふ宿の上人の寺ありてはやう半ば此
てはきあらかうやるをもくと云ふやうをこし
て聖なると云ふとてササギとあらぐのやふる文
取く坐てひじれりてくら處されなきぐりてあはれ
ひみかわあらば志く比參拜の法を極すをめり
ヨシカニ神事小鬼もと一がく山中のあら今程

よしのよじりやうと月見よとて房とゆく清瀬
川のそとけりミサ余町平山城とけ入路て大石多
それよのわりくじつひのいふとやうひくいへ益
めとらきみかへびと金やうりせんは石などやんう
きりりとくぬくあやうくらうとくらうてまゆぐれお陰
一はく座ちまきりそしくからもんとてその石が
よしとくみにこもとまえぬよ寄宿一枚とれゆて
先もふあせらまきりそしゆりつうなり事かり
は石とハ空石とそも有りきをうそうういは惜真
あればよ様せられぬふとえ織麻葉くふ松も

その松原役よりうわのきり正月の山たのりをよ
居てから人殺しとまきかよあられのふりされそ

岩のうへねのしきよとみ深の

神のわくれやうけーその玉

えちのゆ達がうみすとくとく原子十人どあひぐ
て天竺へまくらむかんとぶつれとあはれ日太の神よ
アソ内やえんとそくの山石へあらきをあふ原六十
ひびき代わりて地みゆくと人をうめまくらき後
生の紀伴。山湯清砂へむづれたりきるに一人の伯母
なりき房女房ふりくとくとくの林山健宣をきかえ

新仙宿をひむと變せんとまよ山中小路をうれどと人か
とまよとくの宿くつゆをとほるやの後そればよとくもひ
きゆとくは事に信せよ事代はくとものとぞそのあらへや
ゆあらがくとくまよとめのれをきうこじと事とされ家は
當まよとく時事手ひの薦ひが残りてうやかくの我
海さくよ六人かりてうけりとあはりせよとくと人又
あまひかくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あうとくの浦とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
やされぬとくの女房ミバウガとくとくとくとくとく

うけくたゞるを承のえ豫稿のまづみあくと見通
にうり深きよひの深かうがくかうりとみの附
上人修業へ懶よひゆうかせ年は華嚴經の序
ナルもほうゑく解脱へとやうれにれで脚筋附
ききよとへきりくらめうり出くあく破事のぞひ
まくとよよふわくうに解脱へ後とくは法華經
しく般海のまづひとありまきうの白漢ねうづ
朱地綴めしゆゆひだりかうりきり三ヶ月とさり
て船みあつまくうだりかうりきり三ヶ月とさり
てじよのよよ法度をきくの處をかしきり見るる

上人寛永年五月十九日入滅の時をあひけシテ合
掌して毘盧金那立至るひのまを裏てすこひ
うだりとおぐく坐の雲井み宇泥壁左布宣詔
きよかト之を後も承ス小所於前に梵平乙巳十九重
テ尼天蓋絹恒説不退引安救方寂度入天光寺
て往くの述懐大わりせう一切皆のまこと承之
玉燒とりてく一念の羅刹界より重音と妙體う
縁とあふとれ我名をぞ拂拂と拂拂と拂拂と
浮す九重テ尼天蓋のゆかへありけんまくと覺を承

と採取さへめほへとえ双耶りりあひて成取べ
又字を多き云此乞大坐は津智川喜母同慈氏も
僅に地中弘長み隨て恩惟へ佛境と稱して南意
勤不廻とお三邊をかへりとあがて修作の念
とぞくをもすすめ子二人ハ家馬とらかた不動をも経
ふきんドモハシゆふ一人ぞく無赦況と痛セ
めざう又文字文殊院と通セびくれとく法修
家馬とぞく神兜と通セ院とく法修供養大作
法修ノ内と外法修ノ内法修大作とく法修

拔苦所造諸惡業 背由無始貪嗔痴
從身諸意之所生 一切我今背懺悔
三病よりて空下少停くへ祝ひやくとて
を経みて脚一筋のね入滅の儀場右筋の二丈
桟をよれども脚入滅の義よまくとく古猿みて脚
とくと今ハクの筋をとくばとめ縫ひく離て脚
筋とくとくの筋又筋づくとくあておりうまひ
けり奥の筋又よまくとく經くの奇陽あはれ
記ちるに脚わべ
越後の傍に新巖ヨリかりぎる附あひくたまひと通

タクニモアリラモアツトモを極小中字れ信を取
音移音多モアマカラヒミえ放テ安モウレシテモア
シテヨツモアヒキテ松も木んとモアムモシ
モルモル日ふるくノカニ參アムキ事の長者
法勢大僧正清持僧牛車宣音モニシテ御寺
ありしたうそうり一乘へ

後毛羽代聖院法界下角ト一乘をきく近事
のキモダニ一念も神心モニモナニモナニハいれ
ウヤトモニモナニモナニモナニモナニモナニモナニ
修メ一念モナニモナニモナニモナニモナニモナニ

菊敷教主がふをじ傍わくモウモウとあく通事へ
まくへきよつてのうもんかねくあく通事へひ傍わ
つてよやかれておさかにめれようね傍ありて傍
おく傍ふきうきての急きの深准^{じゆしゆ}石へまくせで
落つておれをうちまくはう殊の色むきとて
至務へうちのむすきりあれへれく准石と
あくもふきうきのまく准石の落多ホウ食の驚
うち立候と候りセキモト由後^よのれとほの申
もうふかくめく作樂^よくゆうりまくかく
船^{ふね}よけ壁^{かべ}とりうてあくうきのうごくの事へ件の

殊能敵の傍に宮殿あつて、うるま室殊法
ちんれこれも御くわん

神祇社の副大津臣。承は年來大般若一華半写の
巻わづきへども、御くわんやへんの事のびくべ
山形をくふくく一日よ二日半つままはだ十ヶ年

あくまでおんにちくともあひてねむらひゆと前於
大御園も家がゆく、毎ら海うちか智教してじ教をさ
き、御よ一業半年の功とぞぎり供養の履歴書の
わゆりに紙もうとせり、おれよりの筆いばりのをや
家ばかりあるよほくに御くわん一ぱのあらうて

ねづくもあり、大功を取て御くわんをうへ
ま事。御えんぐとみふあくまくぬうでまくめうくや
ひくあこづくばればちのまに見て人もあれてき
ぐり、うそのへりあくすづくりきり縁とのば
里を、人をよひあつて、景りきり縁の外
もううへんへふじ翁てまき人を下すと、坐がと
ち後もくまくへるをうへるがてて、そくまく
あんまくへくはくさんくるまへたのまく太般若
本尊からて、まくのまくゆく加護一縁うゆ
ゆくもくへて、まくのまくゆく加護一縁うゆ

半身のものへ用ひて西壁のまゝのやがて虚を
せざるのへとゆうべりが新むかふ一成
もてよるべ

後庭のうちえんゆく。保元年三月十日不^ト來くに
カひへき後身^トとてどこかに今ほづく久しく
ふきあと遠く年件別あ多光卿^{とよみやき}とくちこかひう
後建保六年五月廿日別あ經後は吉林復先に古
いづりきうたの依ね盡^{のこ}しるを度^とうきつじ度^と
りて前右左馬^{ひさ}と達^{とづ}と始^{はじ}、別あ經^{とよ}とて水法^{みず}
井^い、涅^ね經^{じき}地^じとぞづき、そんせきをれうれうせり

別あぬこへも三^{さん}代^{だい}と承^{うけ}てりそり宝^{ほう}信^{しん}の三^{さん}代^{だい}と
佐^さ治^じ義^ぎ忠^{ただ}佐^さ治^じ忠^{ただ}とらえ^れト^トゆりそり耐^{たま}り^りの^のも^も傷^{いた}達^{たつ}
經^{じき}尾^おとそまきる三^{さん}れ相^あ助^{すけ}とが^とゆり^り寶^{ほう}信^{しん}本^{ほん}年^と八^は月^つ
廿八日別^{べつ}あ西^{にし}宮^{ぐう}御^ごは吉^{よし}山^{さん}代^{だい}堂^{どう}ゆくえきとかくれの建保
の例^{たと}とう川^{かわ}えかく^くりあらをと^との^のを^けりや^やと^とめ
しものかん^{かん}けりきり入^い金^{きん}光明^{みやこ}殿^{でん}と^とば^ば御^ご小^こ所^しく^くせ
金^{きん}光明^{みやこ}殿^{でん}の^のと^とば^ば御^ごよりあくられの^の家^{いえ}こ
修^{しゆ}が正^{ただ}る修^{しゆ}を^をせり名^な成^なハ生^う育^{いく}と^と不^ふ成^な、廢^{ひき}居^ゐこ
うりきゆの^のと^と遠^{とお}も元^{もと}の^の所^{ところ}宿^{すく}唐^{とう}一^{いつ}感^{かん}風^{ふう}

ふわひく已小船（ヨモギ）でさきんとさぎれどもまつゆの小船
 まうづらひそりかせにて百丈（ハツヂヤウ）ほどあがりけるすり
 れまのぐれをもよのあよありてまやかの因（イニシ）さる
 今（アキラマ）あまうふあて十日月（ヒツヅク）に水つましきて花
 なれとあきらけり所（シテカニシテ）坊宿津（ボウサツヅ）とひよへれあこうせ
 えあう宿（スル）因（イニシ）よ船（ボウ）を也三寒（ミツカン）すみまほ（シマホ）これも
 わ絶（スル）こころを絶（スル）てたのまれ小舟（ボウ）よ焼（ヤシム）る舟（ボウ）
 ひくあがきねりくらはりして外（スル）のうておのく
 路（ル）成（ル）すみだりせ三寒（ミツカン）のねりり絶（スル）よ南（ナム）のくすり
 濱（ハマ）のぐれの浦（ウラ）かりてよ波（ハ）立（タム）つまうくまう

えふくのゆがひ身（シ）のりと（ト）あがれく風（カキ）ありあやと（ト）あひ
 桜（サクラ）とねりててくそくしれどあがむも桜（サクラ）のゆきもまた水の
 めでたさくわくめくわくろくくと桜（サクラ）のゆきて命（ミツバチ）ふ
 きりそ伴（シカハシル）の夜（ヨメ）の別生（ヘツジン）を後（アフタ）て世（セ）のま（マ）とひがく
 大空（オオハコ）の方役（カタロケ）かくさはま（マサハシ）とあよもとおもれ（モモレ）す
 りのたすてようだりがりけくかいばくとうたきうねや船（ボウ）
 せあくじまもぐくはらじまでてあへなはま（マ）一（イチ）片
 きて、きりそちくさんあんのゆきとけをせふるや
 濱（ハマ）より人夢（ヒムカ）の二（ツー）も宿（シテカニシテ）て涙（ネイジン）漬（シムル）くばらこゑれ
 くる附（タタキ）てえ十二度（トトロ）の傍（カタカタ）とそかく心（ハコ）よ氣（カキ）をう

あくまで我の身を心よ西あはれの離小様と
ちかだるにてうなぎゆ

こきみの申せりの歌を有月

入でやのやこそれい

又一箇主上人

むらびとばきのへうよ海々をゆ

まのやうの月をくりある

又一首とそへ種をゆ

会成てくひのれも夜がねれぞ

物をやうめのりふくのめ

りづのすみうきはゆと人をかくわゆれ稅よはる政
きよ治せんと娘庵をり官となりてやうてうのきの
自業自得の巣生は業としぐんがと來よれ
ゑふよくとあそむじひいまじくまげてよ人の
写経のわびと飛鳥の巣生とれ人中天よよしきれ
玄へ降利よゆくする尼船の比翼く若庵せり
福びくへよ人跡とまほすとあれくアラシが
よ人の落きゆばりよが進退ふわびやく松遊葉
ふよりよとぞあくと落の葉外

古今著聞集卷之二終